

## 地域のため、社会のために、大学ができること。

金城学院大学では、大学の研究・教育成果を社会に還元するため、企業や地域社会と連携した、さまざまなプロジェクトに取り組んでいます。今回はそのひとつ、名古屋市東谷山フルーツパークと生活環境学部(食環境栄養学科・環境デザイン学科)の取り組みをご紹介します。

### 食環境栄養学科の取り組み 「食」で、人と笑顔、地域をつなげる

#### 摘果を有効利用し、新しい価値を生み出す

東谷山フルーツパークは、梨やりんごなど15種類の果樹や、約100種類の熱帯・亜熱帯地方の果物を観察できる農業公園。同園と食環境栄養学科の連携が始まったのは2016年に遡ります。「きっかけは、フルーツパークさんから、摘果して廃棄されてしまう果実をなんとか活用できないか。消費者のフルーツ離れを食い止める良い方策はないか、というご相談があったこと」と、給食経営管理論ゼミを担当する丸山智己教授。摘果とは大きくて形のよい果実を得るために、実が小さいうちに間引いてしまう作業のことで、たとえば桃なら9割の実を摘果するそうです。食品ロスの削減や食品リサイクルの推進がうたわれる中、

摘果の有効利用法の研究は学術的にも社会的にも意義がある。そう考えた食環境栄養学科では早速活動を開始しました。摘果フルーツがどんな料理にあうのか、どんな加工品が作れるのか等の課題に取り組み、その年の秋に開かれたフルーツパークのイベントに参加。ジャムやコンポートを用いたパンケーキ作りが体験できる「作って楽しむカフェメニュー」を企画・実施しました。この時使用したジャムやコンポートは、園田邦博ゼミ(食品学)と清水彩子ゼミ(調理学)が研究で取り組み、調理・加工したもので、素材は同ゼミの学生がフルーツパークで収穫した、摘果フルーツや落下したりんご。本来なら廃棄される果実を食用として有効利用し、地域の人々に広くアピールできたことが評価され、その後の継続的な連携事業につながっています。

#### 地域は活きた学び舎。 教室では得られない気づきがある

現在、フルーツパークとの連携事業のリーダーを務めるのは4年生の加納有葉さんと川原舞子さん。3年次から同園との連携事業



左から川原さん、加納さん、丸山教授。

に取り組んでいます。たとえば幼少期の食事の大切さを学ぶ食育講座では、フルーツパークで収穫した摘果りんごや摘果みかんで作ったジャムやシロップを使ったフルーツカッシュ作りを親子に体験してもらう企画を実施。レストハウスで提供するオリジナルメニューの開発では試作を繰り返し、毎月2種類、新メニューを提案。メニュー作りの際に、四季折々の果物を活かし、見た目の美しさはもとより、作り手の立場を考え、調理のしやすさにも心を配っています。「フルーツパークとの連携事業の企画・運営はすべて学生が担っています。教員は必要に応じて手助けするだけ。学生たち

が企業や自治体と対話を重ね、事業を進める過程で、管理栄養士として活躍するための課題解決力をどんどん身につけていきます」と丸山教授。「若い学生さんの視点や感性を当園の事業活動に反映することで、集客力の増加やサービスの質の向上につながっています。学生さんから良い刺激をいただき、厨房スタッフのモチベーションもアップしました」と、フルーツパークの川上清司さん(管理課 収益事業担当主査)からは、そんな嬉しいメッセージも。フルーツパークを学びのフィールドに、学生たちのチャレンジはこれからも続きます。

#### 春に採用された コラボメニュー

▶フルーツパーク・レモン園の開園を記念して考案した「チキンソテーレモンソース」。



▲初夏にぴったり「レモンパウンドケーキ」。

生地にもレモン、アイシングにもレモン汁を加えて、爽やかな仕上げに。





# tNt s

( 2 019.3.20 3.30 )

sT h  
lhh

Uo oh

S hU

Tdh

stlh

t

hU

bhT

h &g s

T ah

h t

n

U

h lh

&sh

Khonh

s

ghv

Kh



h

T

h

K

U

h

Uh

# O

t

Uy o

U

yNUO a

h T Uh

hUE

oh

htlh

h

h

&UP

U

r Su tU

Kroh

l &ghO

Uht

U

hs t

U



oU

l s h Th



rh  
tohih

TS

# S

S sT

g

U

gU

Go

h U

y s s

g a

gJh

U

U

h



## ソニー教育財団 2018年度ソニー教育支援プログラム 優秀園受賞

### 探究心を刺激する「可塑性のある園庭」と、 その育ちを支える「園庭ワーク」

園が整える環境には、その園が大事にしている保育のねらいや、「こんな子ども達に育てほしい」という願いが込められています。本園では、たっぷりの時間、空間の中で子ども達が主体的に遊ぶことを大事にしてきました。

園舎改築に際しても何度も勉強会を重ね、園庭を「可塑性のある構造」、つまり「子ども達の遊びにあわせて変化できる園庭」として設計、再構築してきました。園庭としては珍しい築山や斜面があり、起伏に富んでいます。築山の中にはトンネルがあり秘密めいた場所になっています。粘土、海砂、川砂など所々変えているので、子ども達は「この土は泥団子、あちはサラ砂」と使い分けたりしています。果樹も多く植えられ収穫を楽しんでいます。遊具は既成のものではなく工房の方々と作ったオリジナルのもの。ブランコ一つとっても、様々な乗り方ができるように工夫されています。ここで、子ども達は

毎日心ゆくまで、とことん遊び、探究し、育ちあっています。この豊かな園庭を、子ども達の心を刺激し続ける状態に保つのは、年4回、保護者、卒園生、地域の方々と実施している「園庭ワーク」です。園庭のメンテナンスをみんなでしながらお互いの絆を深め、子ども達の遊びを支えています。

1999年に現在の園庭の原型が完成して以来20年。子ども達の遊びを刺激してきた「可塑性のある園庭」と、その園庭を守ってきた「園庭ワーク」の活動は、2018年度ソニー教育支援プログラムにて全国146園の中から「優秀園」を受賞しました。(受賞論文はソニー幼児教育プログラムHPにて公開中)



園庭ワークでは園庭の修復や、子ども達の遊びのための仕掛け作り(夏のウォータースライダー設置など)を行っています。



ベルトやロープで作った  
2種類の手作りブランコ!

### 『おなか乗りだよ!』

既成品とは違い、前後だけでなく、子ども達の動きにあわせてあちこちに動きます。「よーい、どん!」で子ども達は走って飛び乗り、おなかで揺らし、「おなか乗りだよ!」と得意顔。乗りこなすには体幹の強さ、バランス感覚も必要です。



### 『もっと流してみよう!』

少しでも気温が上がると雨どいを出してきて水や土を流してみます。「あれ、流れないぞ」「もっと流してみよう」。真剣な顔で雨どいの角度を変えたり、水量を変えてみたり。まさに「遊びは学び」。「水は高いところから低いところに流れる」という理屈を知らなくても、子ども達は遊びを通して身体で学んでいくのです。

「ふしぎだな」  
「どうして?」がいっぱい  
生まれ、子ども達の探究心を  
刺激する「可塑性のある園庭」  
をこれからも大事にしてい  
たいと思っています。

大学1名、立教大学6名、中央大学6名、南山大学40名、同志社大学10名、立命館大学14名などの合格者を出すことができました。また、今年度は医学部医学科の合格者が例年より多く、2018年度卒業生で延べ6名(現・浪あわせて延べ21名)でした。卒業生の今後のご活躍をお祈りしています。

(進学者実数)

国公立大	私立大	金城学院大学	国立短期大学	私立短期大学	専修・各種学校	就職	進学準備	その他 (海外留学など)	卒業生総数
8	106	180	0	4	3	0	12	1	314